

**\*第二演習・2011年度後期\*\*\*\*\***

**A：後期予定**（同学年は五十音順）

- ・第三演習室：11月24日は「キリスト教学研究室」にて  
11/17：4時30分から

- ・隔週、2コマ → 1コマ1人  
60分の発表＋30分の質疑応答  
担当者は資料を準備の上、発表。パワーポイント使用可。

**B：後期発表のポイント**

- ・目標を確認し、それにふさわしく。
- ・D：9月学会発表 or 研究ノート → 1月に2011年度の研究報告に関する発表
- M：修論

**\*キリスト教学と思想史研究\*\*\***

- ・ドミニク・ラカプラ『思想史再考』平凡社。（Dominick Lacapra, *Rethinking Intellectual History. Texts, Contexts, Language*, Cornell University Press, 1983.）

**1. 序論：**

「思想史において機能してきたようなコンテキストの標準的な見方」(10)  
「歴史理解の問題を極端に単純化してしまう抽象的カテゴリー化の一様式として機能」  
「こうしたコンテキスト化のレトリックがしばしば、ひどく史料主義的な読みを促してきたことは事実である。この読みにおいては、テキストはたかだか時代を示す指標、あるいはまた、テキストよりもなにかもっと大きな現象が直裁的に表現されたという程度の代物になってしまうのである。」

「本当の意味ではまったくテキストを読まないことへの言い訳」(11)

「テキストというものがそれ自体閉じられた宇宙であり、また偉大な芸術は自己目的的なものであるという概念と容易に結びついた。歴史家がテキストを単なる史料に還元したように、文学批評家や哲学者は歴史を背景的情報に還元した。」(11)

「文学批判や哲学は現在、自己反省的、自己批判的な理論のいわゆる「重工業部門」をなしている。思想史家が自分たちの分野の諸問題と折り合いをつけるための手段としての概念を手に入れることができるとすれば、それはおそらくテキストの読みに関する理論の発展が最も強力なかたちで現われているこれらの隣接領域を探究することによってである。」(12)

「歴史記述という領域の中の下位分野としての思想史」(14)

「一般に受け入れられている対立関係を不安定にする傾向」、「一方で、自分たちの行為（あるいはテキスト）が、次から次へと発生する事件の大きな流れの中でどういう「結果

をもたらすか」知るすべもない歴史的行為者たちが（おそらく）存在する」、「その他方では。物語を回顧的再構築の一方法として利用する歴史家がいる」(14)「追跡可能な」物語へと諸事件を筋立てていく」「過去にたいする批判的距離を保証し、確固たる語りへの客観的権威を高めてくれるような」(15)

「史料にもとづく知識と一対をなすものとして、過去とのより「対話的な」関係を強調することは、歴史の行為者と歴史家との間の対立関係の緩和に役立つ意味を少なくとも二つもっている」(15)

「過去とは単に、語られるべき、完結した物語ではなく、個々の歴史家が語りを行っていた時代と結びついた過程であること」

「歴史家というものは、あることがら、それが生じた時代に意味していたことと、現代のわれわれにとって意味することとの両方を、理解しようとする営為に没頭する。解釈なるものが最も魅力を発揮する領域」(16)

「テキストとコンテキストとのかかわりという問題から思想史を再考しようとする、どうしても言語の問題が発生してくる」、「言語は表意・行為圏」「人間生活におけるほかの表意行為と結びついたものである」、「言語がテキストとコンテキストの二項対立性を弱め、両者の、時として両面価値的な相互作用を強調する。思想史がなにもものかであるとするれば、重要なテキストを構成する、具体的状況の中での言語使用の歴史である。その意味で、言語の問題に関係するものはなんであれ思想史と無縁ではない」、「ひとつの重要な表意行為」「の中に、またそれを通して、出現する人間存在の可能性と限界をもっともよく理解すること」(16)

「「テキスト」概念のもつ批判的役割は、伝統的な区別や階層秩序を問題化することである」、「テキストを」「土台、現実、あるいはコンテキストの単なる史料であり指標であるにすぎないとする伝統的なテキスト観が怪しくなるのだ。とはいえテキスト（あるいはテキスト性）という概念を、関係の網状組織を究明するために使用すると、「テキスト帝国主義」とか「汎テキスト主義」という化け物が飛び出すのはどうしても不可避的なことである」

「社会的生活にしる個人的生活にしる、これをテキスト」「と呼ぶことは、明らかに隠喩の使用である」、「言語のインフレ」、「危険は冒してみる値打ちが充分にある」(17)

「現在、論文＝書評が独立したジャンルとして特に目につくようになってきている」(18)  
「批評的言説は問題」「にとりくむと同時に、それらの問題を扱っている他者たちの言葉にもとりくむという点で対話的である」、「論文＝書評はまさに、研究とは過去の重要なテキストを媒介とする過去との対話にほかならないとする人文科学的な理解の具体化であると同時に、異議申し立てを受け、再概念化を余儀なくされている学問分野においては欠くことのできない重要な広場でもあるのだ」(19)

「事実認知的な言語使用と修辭的な言語使用（史料主義的な言語使用と遂行的な言語使用）との間の関係」、「学問の修辭法」(19)

## 2. 第一章 思想史再考とテキストの読み：

### (1) 思想史再考とポストモダン→二元論・分裂（視点と方法の）を超えて

「この十年間思想史家たちは、自分らの専門領域が、改めてその本質や目標を問い直さねばならないほど、重大な危機に直面していると信ずるようになってきた」、「いったい自分たちのやっていることはどういうことであり、またそれはなぜなのかに関してはっきり言明するように迫った」、「外圧」、「この思想史という領域、特に近代ヨーロッパ思想史という領域にたいする研究方法では最も成果に富むとわたしとしては考えているものを比較的理論的な観点から定義し、かつ擁護する」(22)

「思想史研究の歴史」「様々な見方」

「内的あるいは内在的観念史」、「外在的あるいは「コンテクスト」的な思想史の見方」、「内的な見方と外的な見方との統合をめざすもので、たいていのばあい「人と思想」の物語というかたちをとっているもの」

「思想史は、ますます些末化していく問題を取りあげ、これに内的方法を適用することによって狭義の専門化に陥ったり、時には好古家的にさえなったりする傾向が一方にあり、あるいはまた、「人と思想」の冒険を物語ることによって、ほとんど無限に、啓蒙的・入門的レベルに固着しつづける傾向が他方にある。これらの問題にたいするひとつの解答は、近來とみに精緻化された観念の社会史によって出されたように思われる」、「その厳密化と方法論的洗練性において古い形態のコンテクスト主義をのり越えているからであり、また現代の社会史の矚目すべき成果へと思想史を接近させることを約束している」、「とはいえ思想史を、単なる社会史の関数とみてはならない」(23)

「思想史と社会史との関係性」

「思想史の限界」「思想史と他の見方との関係」、「思想史とは」「諸学横断的な学問」

「わたしが活性化したいと思っている問題関心の中心は、複雑なテキスト——使用の伝統に属するいわゆる「偉大な」テキスト——の読みと解釈の重要性、ならびにこれらのテキストを、これに関係するさまざまなコンテクストに関連づけるという問題を定式化することの重要性ということである」(24)

「テキストがしばしば極度に還元主義的な解釈の対象となってしまう」(24)

「歴史的な理解なるものについての史料主義的なとらえ方が支配している」、「一切の対話の軽視」(25)

「「内部」と「外部」の概念を再考すること」、「もろもろの表意行為間の相互作用の問題」、「人は「つねにすでに」その問題に巻き込まれていること」「意味の可能性ならびに意味の限界の問題」、「言語使用、言語外の表意行為、ならびに表意作用過程と結びついたさまざまな人間活動様式相互間の関係如何という問題が、どのようにテキスト性という概念によって明らかになるものとなるかを調べること」、「史料に基づく過去の再構築と過去の対話との関係如何の問題である」(26)

「ハイデガーが伝統の「未思惟の思考」と呼び、デリダが「脱構築」と呼ぶものの中で提起されたタイプの問題」、「歴史的伝統の中で隠蔽されたり抑圧されたりしているものを復権させ、さらに、これら隠蔽され抑圧されているものを、現在支配的形態をもって有害な働きをしている諸傾向ともっと対等に「競わせる」ことによって、あの歴史的伝統の行

き過ぎを夢遊病的な反復するのを回避しようとする批判的探究である」(29)

「テキストの史料的傾向と「作品的」側面を区別すること」(29)

「史料」も「作品」もともに史料的な要素と作品的な要素との相互作用をともなうテキストなのであって、その相互作用は、批判的歴史記述の中で検討されなくてはならないものである。」(30)

「「他者」との対話」「生産的な学問になるかどうかは、「正しい」問いを投げかけるかを含め準拠枠との関連においてのみであり、これらの問いそのものが、決して全面的に対象化されることも、十分に認識することもできないある「コンテキスト」とか「生活＝世界」の中に位置づけられるのである」、「そればかりではない、ハイデガー」、「過去の思想家が意識的に、あるいは意図的に思考することはなかったが、それでも依然として問うに値する彼の「未思惟」を構成しているものを探究することによって初めて過去との対話が、その思想家の思考のうちでも現在と未来にきわめて強い影響を及ぼすような領域に入ってくる」(30)

「ある出来事なり現象が欠如していたとしたら、あるいは重大な変更を蒙っていたとしたらどうなっていたであろうかと仮定することによって」、「変形可能性の理解」、「問いを発する当の人間が、対話の相手たる「他者」によって問い返されることになる」、「歴史家の歴史性は、彼の発する問いと「テキスト」「の中で彼が出す「答え」の双方において問題となる」、「史料的な傾向と作品的な傾向との相互作用によって緊張が生じ、この緊張は制御と排除の過程を通して初めて解除される」(31)

「社会史はしばしば、概念史を因果論の枠組みと社会的母体なる概念にあてはめるだけで、現実になが引き起こされているか、なにが衝撃を与えているのかを批判的に調査研究しないのである」、「過去の重要な側面であっても「敗退」したかもしれないものを回復再生してみる必要性を歴史記述から奪ってしまうのである」(33)

## (2) テキストの意味とコンテキスト

「十字路にある問題」「あのテキストと、それに関連のあるさまざまなコンテキストとの関係如何という問題」、「六つの研究領域」(33)

「唯一固有のコンテキストに訴えるということがそもそも錯誤」「コンテキスト」という概念の実体化、「コンテキスト群の相互関係は可変的で問題含み」

「六つの「コンテキスト」とは意図、動機、社会、文化、作品群、構造」(34)

「一、著者の意図とテキストとの関係」

「意図の重要性を否定するつもりはない」(34)

「重要なことは、意図なるものがしばしば、その発話なりテキストに著者の賛同しえない解釈が加えられた際に、後から振り返ることによって明確に表されるということである。はじめは自分の意図を全面的に明らかにする必要を感じないかもしれない。あるいはそんなことは不可能だと関しているかもしれない」(35)

「著者の意図はテキストの妥当な解釈に到達するための究極的判断基準であるという考え方を動機づけているのは、私見によれば、きわめて狭い道徳的・法律的・科学的前提である。道徳的にも法律的にも、人は発話にたいして全面的に責任を負わねばならず、対話者

とは擬似契約的な、あるいは完全に契約的な関係にあらねばならないと信じている人もいよう」(36)

#### 「二、著者の人生とテキストとの関係」

「人生とテキストの間には、時として著者の意図を超えた、いや著者の意図に反することさえある関係が存在するばあいもある、という信念」(37)、「性格分析的視点において追求されるのは著者の動機」

「テキストも人生も、多かれ少なかれ明示的なかたちで自らを問うこともあるし、一方が他方を問題にすることもある。それぞれ別個の存在であるかぎり、人生もテキストも単純に合致することはない、いや、互いに疑い争いあうことさえあるような発展のパターンや反復の形式によって特徴づけられよう。書かれたテキストと生きられた「テキスト」の双方に共通する問題も、それぞれ別々のかたちで解決されたり、結着をつけられたりする」(38)

「自分の仕事を真剣に考えている」「作家にとって書くことは、決定的に重要な生き方なのである」(38-39)、「「実人生」の問題の比較的単純な理解によって、テキストの意味や、人生とテキストの相互作用やらを解明する因果関係の、あるいは解釈上の、鍵が与えられると信ずるなんてとうてい信じられないところである」、「極度に還元的な解釈の端緒」、「テキストと実存的過程をうまく結びつけるというこれまた困難な問題」、「解釈されるべきテキストは、はるかに大規模な、おそらくはずっと複雑なものとなる」(39)

#### 「三、社会とテキストとの関係」

「個人の生活は社会との重要な連関をもなせることなく論ずることはできない」、「過去の社会の経験的再構成のためにテキストの使用について研究するある社会史の観点からではなく、社会過程とテキスト解釈との関係を探究する思想史独特の観点から」

「フーコー」「制度と言説形式との相互作用を示す言説的慣習行為という概念の精緻化」(40)、「比較的伝統的なマルクス主義的な型式」(41)

「デリダの分析の中で提起されているもっとも大きな問題とは、形而上学の歴史などの長い複雑な伝統と、特定の時代あるいは時点」「と、特定のテキストと、この三者を関連づけるという問題である」、「単なる連続とか非連続とかいった概念で決定することは不可能である」、「問題は、長い伝統、特定の時代、テキストがどのように相互に、変化をともしないつつ反復しあっているかであって、こうした変化の重要度、ならびにその解釈方法とが解明すべきことがらとなる。テキストは長い伝統と特定の時代とが交差する「場」とみなされ、その両者に変化を及ぼすのである。しかしテキストは、固定されたり、自律的節点として提示されることはなく、完全に相関しあう網の中に位置づけられる」、「この関係網こそ、解釈上最も難しい問題のひとつ」(43)

「「影響」という問題を理解するには、テキストが正典化される過程を含めて、テキストが時の中で蒙る複雑な読みと使用の流れをみるのがいちばんいい」「選択的解釈」「堆積し層をなし、発掘が不可欠な「読み」」(44)

「議論と再考を通して修正に開かれている」(45)

「文学は、異議申し立て的性格がより強いことを示すひとつの証左」、「書評を含めて批判的反応の歴史は、社会的影響の歴史」「の中の重要な一章となる」(46)

#### 「四、文化とテキストとの関係」

「レベルの異なる文化の間でテキストが流通するか否かは複雑な問題」「そもそも「レベル」をどのように決めるか」

「読者の興味を「回復」させ、親しみを覚えさせるような種類の思想史のひとつの重要な役割」(46-47)、「いやテキストそのものを読まない言い訳として働くようなものにさえなる」(47)

「民衆文化という概念そのものは主として、ひとつの理想として、批判のための虚構として、あるいは「近代的」諸力に対置されるべきひとつの目標として現れてきたものであった」、「思想史は、思想家＝知識人の歴史、彼らが機能を果たしている言説共同体の歴史、また彼らが、より大きな文化にたいして表示するさまざまな関係」「の歴史であるはずである」(48)

「「偉大な」テキストと一般の、あるいは民衆の文化との関係如何という問題」

「ミハイール・バフチンが「カーニヴァル化」という言葉を用いて論じている過程は、民衆文化の一種」「を同定するのに役立つ」、「より広い意味においては、「カーニヴァル化」はひとつの魅力的な相互作用過程なのである」(51)

「ラブレエの生きていたルネサンス期には社会制度としてのカーニヴァル、民衆文化、高級文化との間には生気に満ちた相互交流が存在していたという」、「近代という時代は、カーニヴァルの衰退、民衆文化からエリートたちの分離」「といった現象を目撃した」(52)

「民衆文化からのエリートたちの撤退は、一五〇〇年から一八〇〇年にいたる長い期間にわたって徐々に行われた」、「十九世紀になると人々は民話その他いろんな形態の民衆文化に目を向けるようになったが、それはしばしば、「行き過ぎ」だと感じられていた〈啓蒙運動〉にたいするさまざまな反応の一側面としてであった」

「カーニヴァル化という概念は、近代的著作の著しい特徴となっている政治的色彩を帯びた異議申し立て的文体を解釈するためのひとつの手立てを与えてくれる。事実、カーニヴァル型の行動にないする公的機関の抵抗は、政治的・文化的不安感から発することもある」、「最近の著名なフランス人（たとえば、フーコー、ドゥルーズ、ソレルス、クリステヴァ、デリダ）の著作のある面は、カーニヴァル化の過程という点からみることができ」  
「一九六八年にフランスで起きた諸事件」(53)

「五、テキストと作者の作品群との関係」

「あるテキストと同じ作家の他のテキストとの関係ばかりでなく、他の作家たちのテキストとの関係の問題」、「作品群の統一性、ないしは同一性」

「作品群は大字で書かれた単一のテキストのようなものとなる」、「分断と創造的解体が含まれている」(54)

「六、言説形式とテキストとの関係」

「多少とも形式化された言説様式や、解釈構造や、約束事ないし規則のもつ役割」、「多くの理論家が、著述や読解には構造や約束事が浸み込んでいると主張している」

「ヘイドン・ホワイト」「プロット構成の様式が、一貫性をそなえたすべての物語にいかにかに浸み透っているか、また、修辞がいかに言語場を構築するかを明らかにするため、文学と歴史の対立関係を和らげてくれる深層構造のレベルにまで到達しようと試みた」、「構造主義的な言説では十分に探究しきれなかった問題を再び提起する助け」(55)

「そのテキストがかかわり、われわれを引き込む過程」、「その過程にひとつがまさに、

統一性、同一性、純粋性への欲求と、それに異議申し立てをする諸力との間の相互作用にほかならない、「統一性や、それに類する概念を、より有効な、かつ批判的な見地から再考すること」(60)

### (3) 過去の再現か現在主義か

「過去の再構築としての思想史と、過去との対話ないし会話としての思想史との区別——この区別は純粋な二項対立として受けとるべきではない」(60-61)

「純粋に史料主義的な歴史記述観はそれ自体、ヒューリスティックな虚構であること」

「純粋に史料主義的な歴史記述の見方は、歴史的なものの歴史主義的な定義としばしば一致する」(61)

「その両極端とは、ひとつは純粋に史料主義的な過去の再現＝表象であり、他のひとつは歯止めなき虚構化や神話化によって歴史の「重荷」からの解放を求める「現在主義的」な探求である。これら二つの極（同一の複合体の部分構成する）との連関では、単なる主観性に還元することのできない活動としての解釈のあり様を強調することが必要である」(63)

「「過去のための」過去という純粋に史料主義的で観照的な考え方に真にとって代わりうるものがあるにしても、それは単純にその逆のものではない」(63)

「対話的な方法で現在の中へと——未来をまきこみつつ——引き込まねばならない」、「「創造的誤読」(あるいは積極的「書き直し」)という概念」、「「解釈とは、過去と対話している歴史の読者の「声」であるとする隠喩をたとえ受け入れるとしても、過去には過去独自の尊重さるべき「声」があるということ」、「「テキストというものは抵抗のネットワークであり、対話は二方向のものである。良い読者とは、注意深く、忍耐強い聴き手でもある」、「「耳を傾ける寛大性が、過去にたいして投げかける問いのかたちそのものを変えてしまうのに一役買うことさえある。純粋な史料主義と「現在主義」という二つ極端は、このような可能性を否定しているかぎりにおいて「独話的」である」(64)

「テキストを読むためのコンテクストとして最も重要なもののひとつは、われわれ自身である」、「「現在と過去と未来との相互作用」「理解と行動の両方に関係のある相互作用」(65)

「初期〈アナル〉派の比較統計学的方法から、社会文化的「意味」の問題にたいする関心へと変わってきているが

「思想史は回顧的な象徴人類学ないし文化人類学にほかならないという定義につながりかねない」「人類学的なブルドーザー効果」、「しかし文化の中にあるものはその例外的な産物を保存し、再解釈を加えるための「装置」を提供する。思想史とはそういった「装置」のひとつにほかならない」(67)

「思想史の見方の行きつく先はどこか」、「二つの傾向への分裂」、「ひとつの傾向は、多少自覚的に、叙述、解釈、説明への伝統的なアプローチを修復しようとするもの」、「生活と時代の中に、統一と秩序を、ある決定的なレベルで発見することの必要性、いやひよっとすると創出する必要、を強調」、「最優先の目的は、混沌の中に秩序を開示すること」(68)

「これに対立するもう一方の傾向」「第一のアプローチをとる人たちを騒がす論争が実際は共通の前提基盤をもつものであることを明らかにしようと努め、またこれらの限界を指摘する」、「より「実験的な」傾向」「テキストあるいは人生における周縁的なもの」「の重要性を強調する」(69)

「問題の全般的な再考」「この再考の過程に含まれるものとして、全き統一と全き不統一」「はともに理念的限界であって、言語や人生においては多少とも接近しうるものでしかない」、「こうした限界が過去のテキストとコンテキストの中でどのように関係づけられてきたか、また、現在および未来においてどのように関連づけられるべきかということが一般的问题となる」(70)

#### <参考文献>

1. Paul Ricoeur, *Temps et récit*, Tome I(1983), II(1984), III(1985), Seuil.
2. 磯前順一「〈日本の宗教学〉再考——学説史から学問史へ」、日本思想史懇話会編『特集——近代日本と宗教学：学知をめぐるナラトロジー』（『日本思想史』no. 72、2008.）ペリカン社。
3. 松山壽一『ニュートンとカント 力と物質の自然哲学』晃洋書房。  
「本書の以上のような諸解釈を方法論的に支えているのは概念史的研究法である。ここに概念史的研究法とは、主題とする概念を含んでいるオリジナルな諸テキスト、一次諸文献を直接研究し、それらを比較照合しつつ、テキスト間の連関、つながりを推測し、それに基づいてテキストの文言を解釈し、当の文言、概念の成立、変遷、発展を跡づけるものである」(iv)。
4. トレルチ『古代キリスト教の社会教説』教文館。  
「序論と方法論上の予備的諸問題」  
「以上でもってわれわれの研究に対していくつかの方針が与えられる。われわれは至るところでまず第一にキリスト教の固有の社会学的理念の構造及び組織について問わなければならないであろう。」(31)  
「第二には、この社会学的な形成物と社会的なるもの即ち国家、経済的一分業社会及び家族との関係について問われねばならないであろう。」(32)
5. Stefan Collini (ed.), *Unberto Eco. Interpretation and overinterpretation with Richard Rorty, Jonathan Culler and Christine Brooke-Rose*, Cambridge University Press, 1992.
6. 安酸敏眞「『思想史』の概念と方法について——問題史的研究の試み」『人文論集』（北海学園大学人文学会）46号、2010年、97-145頁。